

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 23 日現在

機関番号：32617

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370085

研究課題名(和文) 脱国民国家の思想からオルター国民国家の思想へ 近現代日本のトランスナショナリズム

研究課題名(英文) From the idea of "post" nation-state to the idea of "alter" nation state:
Historical development of transnationalism in modern Japan

研究代表者

芝崎 厚士 (Shibasaki, Atsushi)

駒澤大学・グローバル・メディア・スタディーズ学部・准教授

研究者番号：10345069

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：箱根会議、及びその前身となり、会議終了後もその影響を受けて活動を継続している北海道国際交流センターの研究を通して、近現代日本のトランスナショナリズムの通史的展開を実証的に跡づける基礎作業を打ち立てた。

同時に、伊藤憲宏氏に代表される国際交流の思想的な意義に関する研究を進め、さまざまな関係者への聞き取り調査を含めて、脱国民国家からオルター国民国家の思想への変容が、グローバルなトランスナショナリズムの生成過程と呼応しつつ、ここ40年の間にどのような思想的な変容を伴いつつ生み出されていったのかを検証することができた。さらに、学会報告や資料の公開を通して幅広い関心を喚起することにも寄与した。

研究成果の概要(英文)：There are three main goals which this study of the transformation from the thought of post-nation state transnationalism to the emergence of the thought and behavior of alter-nation state global transnationalism.

First this study has accomplished most of basic historical research for the Hakone Conference and the activities of HIF, by assembling the documents and records, interviewing most of the important figures. Second, this study especially focuses on the development of the idea on international cultural exchange or international/global networking, by re-estimating the significance of the thought of Norihiro Ito, who first devised the idea of 'catalyst' theory or the 'grand design' of global transnational networking in Japan.

Lastly, this study succeeded in disseminating the importance of elucidating the history of the development of transnationalism (both behaviour and thought), by realising the symposium in the academic conference and re-publishing historical articles.

研究分野：国際関係論、国際文化論、国際関係思想史

キーワード：トランスナショナリズム 箱根会議 脱国民国家

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初において、近現代日本に於けるトランスナショナリズムの研究は、二重の意味で欠落してきた。第一に、世界各国におけるトランスナショナリズムの研究に比して著しく立ち遅れており、基礎的かつ実証的な研究がおざなりにされてきた。第二に、知勇規模でのグローバル市民社会の形成過程において日本における活動が諸国の運動とどのように関連し、連繋していったのかという点についても十分な考察が為されてこなかった。

こうした背景に基づいて、第一の基礎的かつ実証的な研究を、その思想的背景にも注目しながら検証していくことを中心として、第二のグローバルな連繋や関連といった文脈の中で意義づける作業へと接続していくことが課題となっていたのが研究開始当時の状況であった。

2. 研究の目的

こうした背景を踏まえて、本研究は、「国境を越えた行動と国境を越えることに関する思想の総体」を「脱国民国家の思想」ととらえ、近現代日本においてトランスナショナリズムをはじめとする「脱国民国家の思想」が冷戦期後半に成熟していき、さらに冷戦後以降現在に至る四半世紀の間に「オルター国民国家の思想」へと変容していく過程を思想的、実証的に研究することを目的としていた。

本研究は3年計画で、(1) 80-90年代の「箱根会議」(「国際交流担い手ネットワーク会議」、1988-97年開催、2001-02年に第二次開催)およびそれと関連する諸実践、(2) 60-80年代の馬場伸也、鶴見良行といったトランスナショナリズム研究者、(3) 冷戦期後半から90年代以降現在に至る、中村哲、遠山正瑛、吉岡秀人などといった人々の諸実践とそこに見出される思想という3本柱に関して、史料を収集し、インタビューを行う。同時に脱国民国家の思想およびオルター国民国家の思想と行動に関して、国際関係理論にとどまらず、現在在籍しているグローバル・メディア・スタディーズ学部の視点から、社会学や情報学のメディア研究やコンテンツ制作の視点を大胆に取り入れつつ考察することで、実証、思想、理論の3つの面から、多角的にアプローチすることをめざした。

基本的にはあくまで実証的な事実の解明が中心となり、同時に、収集した史料やオーラル・ヒストリーで得た記録などをアーカイブすることも重要な課題であった。

3. 研究の方法

1年目の平成26年度は、理論的・思想的な先行研究および自らの研究成果の整理及

び史料収集、聞き取り調査の継続が主になった。対象とする関係者は箱根会議だけでも延べ1000人近くになり、そのうち主要な関係者には数度に亘り詳細な聞き取りが必要であること、各地方の国際交流団体に取材をする必要があり、現在判明している限りでは一次史料がまとまった形では残っていないため、最低でも2年間は基礎的な調査を主眼とした時間配分をせざるを得ないと予測された。

2年目の平成27年度は、箱根会議とその関係者の考察を中心に進める予定であった。できうれば、(1)箱根会議と(2)思想面・理論面の研究を5:5の割合で研究したいが、箱根会議研究に予想以上に時間がかかったこともあり、(1)の比重が重くなっていった。

3年目の平成28年度は、箱根会議の研究を上げると共に、思想面・理論面の研究を完成させることが目標となる。収集した史料の電子化を視野に入れた分類・整理を行うこと、理論面、思想面での考察を、実証的に解明できたことと照合しながら行うなど、研究の総仕上げの段階とした。

4. 研究成果

本研究の研究成果は、次の通りである。

(1) 箱根会議の前史における南北海道での国際交流活動の基礎的調査の達成と、日本におけるトランスナショナルな民間交流活動の通史的把握への基礎的考察の達成

第一に、箱根会議の前史として、提唱者である秋尾晃正氏が1979年が南北北海道で開始した「国際交流のつどい」に関する文献収集と関係者への聞き取り調査をかなりの程度進めることができた点があげられる。1979年当時の関係者は一部物故されているものの、初期の関係者の多くに聞き取り調査を行い、各種報告書類や一次資料などを入手する機会に恵まれたことは大きな成果であった。

また、現在同活動を行っている北海道国際交流センター(HIF)は、その後活動を狭い意味での国際交流から大幅に拡大して、北海道を代表するばかりか日本でも指折りの多種多様な活動を展開するCSO(市民社会組織)として知られるようになった。

本研究ではHIFの事務局長である池田誠氏と緊密に連絡を取り、取材を行い、実際の交流事業にも参与観察的に参加してきた。また、後述するように国際文化学会において箱根会議創設者と池田氏をまじえたパネルを開催することで、過去と現在のトランスナショナルな交流の位相差を、その連続面と断絶面の双方を検証していく形であぶり出すことができた。このHIFの歴史的形成過程と現在に至るまでの活動の展開を通史的に把握することは、これまで十分には明らかに

されてこなかった、特に地方における民間ベースのトランスナショナルないしグローバルな交流が日本でどのように形成され展開されてきたのかを知る上で重要な研究課題であり、現在この活動について論文を執筆中である。

(2) 箱根会議、近現代日本のトランスナショナリズムに関連する基礎的な資料収集

北海道での国際交流活動の資料収集に加えて、箱根会議に関連する基礎的な資料収集も継続して行った。平野健一郎、秋尾晃正といった主要な関連人物に加えて、過去の関係者からも資料提供を受けると同時に、日本でのトランスナショナリズムをグローバルな文脈で理解する上で重要と思われる関連資料も入手し整理を継続した。

(3) 箱根会議創設時関係者への基礎的な聞き取り調査の達成

聞き取り調査も過去3年にわたり継続したが、その集大成として、平成27年度には最も重要な関係者のうちの3名、平野健一郎、秋尾晃正、阿部汎克の三氏に鼎談していただき、その模様を記録することができた。この記録については整理した上で何らかの形で公開する予定である。

(4) 箱根会議創設時関係者の思想的考察の基礎作業の達成

箱根会議に関連して、当時の国際交流に関する思想的な考察を進める中で、もう一人の重要な関係者であった伊藤憲宏氏が90年代に残した一連の考察がある。これらは当時の箱根会議関係者、つまり当時広い意味での日本の国際交流を担い、現在はさらに重要な位置についている関係者の多くが参照し、影響を受けてきたものであった。しかし、伊藤氏の諸論考は諸般の事情で入手困難となり、その同時代的意義や日本におけるトランスナショナリズムの思想の歴史的な文脈における意義が的確に検証されることがないまま埋没しつつあった。

そこで、著作権等の問題を確認した上で、伊藤氏に数度にわたり著作についてインタビューを行った上で、特に重要と思われる「国際交流のグランド・デザイン」と「カタリスト論序説」の2本を、研究代表者の所属先である駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部の論集に、解題を附して掲載した。これによって内外の研究者に、伊藤氏の貴重かつ重要な論考が再び容易に入手可能となり、伊藤氏の思想の再評価を試みる機会を得ることができた。

伊藤氏の議論に関しても、現在執筆準備中である。

(5) 国際文化学会における共通論題パネル開催

平成28年度には、国際文化学会において、箱根会議関係者である平野氏、秋尾氏、前述の池田氏、さらに青山学院大学の高橋良輔氏を迎え、箱根会議の歴史的・現代的意義を考える部会を開催した。

研究代表者が箱根会議の歴史的・現代的意義を総括する基調報告を行い、池田氏が、箱根会議以前の北海道での国際交流活動と、箱根会議以後、特に21世紀以降池田氏が事務局長として担ってきたHIFの活動を分析した。この2つの報告によって、箱根会議以前・箱根会議・箱根会議以後の日本におけるトランスナショナリズムの歴史的な流れを捉えようとする試みであった。

さらに、この報告に対して、学術経験者として会議に関与し、国際交流研究の専門家として活動してきた平野氏、箱根会議以降も独自の市民社会組織をもとに精力的に活動してきた秋尾氏がコメントを行い、さらに、学術研究と市民社会の実践両面に深く関与している高橋氏が現代的な意義について問いかけるコメントを行った。

こうしたポリフォニックな構成によって、近現代日本において「脱国民国家の思想」と「オルター国民国家の思想」が同交錯していたのかという本研究の大きな目的を考察する上で重要な知的課題を達成できたと考える。

(6) 成果を総括する単行本の刊行準備

こうした一連の研究成果については、きわめて多岐にわたることもあり、それぞれに関して少しずつ研究成果のとりまとめを行わずに、現時点では雑誌論文や図書の形では十分には発表できていないが、成果を図書の形で刊行することを現在計画之中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件) ただし伊藤憲宏論文への解題2件あり

〔学会発表〕(計 1 件)

芝崎 厚土、「箱根会議の歴史的・現代的意義国際交流・国際文化交流史の視点から」、日本国際文化学会、2016年7月17日、早稲田大学(東京都・新宿区)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

芝崎 厚士 (SHIBASAKI, Atsushi)
駒澤大学・グローバル・メディア・スタデ
ィーズ学部・准教授
研究者番号：10345069

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()